

逗子市まちづくり懇話会について長島孝一氏インタビュー

NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会 研究活動

2019年9月2日午後2時から5時

逗子市新宿長島邸

インタビュアー：田村千尋、田口俊夫、関根龍太郎、青木淳弘、奥津憲聖

2019年9月2日、NPOの「市民の政府」論勉強会の活動の一環として、建築家の長島孝一氏へのインタビュー調査を行いました。逗子市新宿にある長島氏のご自宅にお伺いし、午後2時から3時間ほどお話を伺いました。訪問したのは勉強会メンバーの田村千尋、田口俊夫、関根龍太郎、青木淳弘、奥津憲聖の5名です。田村明は1986年10月から1993年3月まで逗子市まちづくり懇話会の会長を務めていましたが、この時、副会長を務めていたのが長島氏でした。インタビューでは長島氏と田村明との出会い、田村明が逗子市まちづくり懇話会の会長を務めることになった経緯、池子の森を守る市民運動とその後の逗子市政など逗子のまちづくりについてお聞きしました。長島氏のご自宅は法律家であった長島氏の御祖父様・長島鷲太郎氏の別邸として1900(明治33)年に建てられました。現在は国の登録有形文化財となっています。今回の訪問では田越川に面する裏庭の木陰で、お話を伺いし、キャサリン夫人にも貴重なお話をお聞かせいただきました。今回のインタビュー調査を踏まえて、引き続き「市民の政府」論勉強会では、田村明がどのように逗子のまちづくりに関わったのかを考え、田村明の実践と「市民の政府」論との関係性を探求していきます。(文責：奥津憲聖)



△インタビュー風景：右端が長島孝一氏

長島孝一 田村明さんとの出会いって言うと、もうすごく古い話で、私が中学2年ぐらいのときにお会いしてるんですよ。でも、紹介されてごあいさつしたってことはなくて、田村さんが東大法学部の学生だった頃ですね。なんでかという、うちに東大の法学部で勉強していた学生さんが一人下宿してまして、その友達としてうちにみえて、他のもう一人ぐらいやっついてましてね、近所に。それで、うちにこられたんですよ。そのときに、ごあいさつしたかなっていうか、こんにちわしたぐらいで話したわけじゃないんだよ。帰ってから、うちにいた傘木さんっていう学生さんが言うには「僕の友達の田村さんが、このうちはもしかしたら、フランク・ロイド・ライトの関係した建築家が設計したんじゃないかって言っていたけどそうですか」って聞かれたわけ。東京の芝白金三光町っていう所にありました。日

東坂っていう坂の所。それで、それは田上義也か。ライトが帝国ホテルを設計していたときに、そのスタッフの一人として働いていた人なんだね。だから、大学は出ていなくて講習学校とかそういうのを出て。それで日本の官庁に勤めていて、恐らくその官庁から出向したのか、ライトに憧れて行ったのか、とにかくそういう形で働いていたんですね。その方はライトと同じで、ライトもサリバンの所にいたときに、シカゴの郊外の住宅地の現地のアルバイトでやっていたじゃないですか。それと同じようなもんで、ご自分で幾つか設計したんですね。それがライトふうなわけなんですよ。材料も帝国ホテルで使ったスクラッチタイル、あれを腰に使っていたりとか、それから窓のパターンなんかもそうだったり。それから要するに、ひとしら肩に出て、2階建てですけども屋根が非常に強調されている。それと大谷石を使っていて、暖炉とか庭の池の周りの石とかに大谷石が使われる。だから、確かにライトの息のかかった人が設計したっていうふうに田村さんが思われたのはさすがなんですね。それっきり別にお会いしたわけじゃないんだけど。

その次にお会いしたのは、私が榎文彦事務所に勤めていたとき、1966年ぐらいだったかな。私は1969年の秋から72年の秋まで、シンガポール国立大学で教えてたんですね。そこにアーバンプランニング構想をポストグランディアレベルで作りたいて言うんで、それの設立をするように言われて。だから、考えるとよく行ったもんだと思うけども。30にして立つ。だから、三十幾つだったんだろうね。33か34ぐらいですね。だから30にして立つんだから、誰の助けも受けないでやるいいチャンスだと思ったから、それで行って2年半ちょっと教えて帰ってきたんだけど。

帰って来る、行く前かなんかにも、もしそうだとすれば69年の秋ぐらいだと思うけど。田村さんが日本橋の榎事務所にお見えになったんです。よく笑う人だなと思って。榎さんと会うと、ハッハッ笑って。それで、帰ってきたときは72年だったんだけど、そのときには榎事務所は田村さんの肝いりで、金沢地先埋立地の並木の住宅地のマスタープランをやっている、それが始まっていて。もう既に方針として低層高密度でつくろうということは基本的に決まっていますね。その中で作業は少し始まって、元倉君だとか中村勉だとか、そういうのがやり始めていて。僕はそこに入って、そのチーフになって、それでやってきたんだけど。その間に横浜市にたびたび打ち合わせとか、何とかに行く機会もあって、それで田村さんにも多分お会いしているんですね。だから、そのときに田村さんとどんな話をしたかあまり覚えてないけども。そこら辺が始まりですかね。

B-1 　そういうふうに幾つかこういう接点を持つ機会があったんですけど、一緒に仕事をしたっていうのはあったんですか、田村さんと。

長島 一緒に仕事をしたっていうか田村さんは一緒に仕事するとしたら、私が企画調整局次長ぐらいになってなきゃないでしょう。田村さんがいろいろと作られたりしたプロジェクトの中で働いていて、そのとき時々、田村さんのご尊顔を拝することもあったけども、

田村さんと一緒に仕事をしたっていう感覚はない。田村さんから言われた仕事を、榎事務所がもらった仕事をやっていて、僕はそれで1978年に独立したんだけど、そのときは並木はほとんど終わっていて、海の公園のマスタープランとかそういうのをやっていた。独立したときに榎さんが、それを続けておまえの所でやれって言われて、それで海の公園を中村勉と一緒に独立したんで2人で。そのとき、ちよろちよろっと描いた海の公園の島の形がそのままできちゃって。

Bー そうでしたか。その後、80年代の終わりぐらいになって、まちづくり懇話会というのを、今われわれがその資料を読んだりして勉強させていただいてるんですけど。そこに田村明さんがどういう経緯で呼ばれたのかっていうのはご存じですか。

長島 どういう経緯っていうか、田村さんとは割と気楽にお付き合いをしていたわけだし、それから、お正月とかそういうときには、うちでパーティーやるときにはよく来てくださって、ご夫婦でね。こちらの田村さんのご親類が逗子におられて。ご主人は東大の文学部の先生。とにかく非常に親しい間柄。田村さんがこられたときは一緒に来て。とにかく無教会主義の親戚ですよ。そういうことで20人ぐらいが集まって、そのときは榎さんも来てたりとかね。あとは榎さんと一緒にいろいろしてたという人。そんなことで中学からのご縁もあるもんだからずうずうしく親しくしていましたけどね。

Aー そうすると、流れとしては結構中学っていう若いときに見掛けたと、顔は覚えた。従って、印象というのをアピールがパッと来るというよりも、お兄ちゃんみたいな感じのそんな親しさみたいなもののほうが先にあったから、その後でどうのこうのっていう政治的な意味合いは何もなかったっていうことですね。

長島 だから、逗子で例の池子の森の開発を、米軍住宅の建設をストップしようっていう市民運動が起こって、結局、足かけ全部で12年ぐらいやっていたんですよ。最後のほうでは、リーダーの富野暉一郎（1984/1992）さんが市長になって、その後継者として3期目が澤光代（1992/1994）さんだった。女の市長、澤さんがなりましたけど。富野さんも最初運動を始める頃に、富野さん、私よりうんと若いですから、私が会うと、私よく余計なことをやってるってことを知っていたもんだから、うちにあいさつにみえて、それで、いろいろ僕、引き込まれて。それで田村さんは、まちづくり懇話会の座長になっていただいたんですよ。私がレコメンドしなくてもそういうふうになったと思うけども、富野さんにはレコメンドしたんじゃないかと思えますね。それも正面切ってどうのっていう話じゃなくて、ずるずるとかもしれないけどね。

それで懇話会っていうのは九つぐらいの部会をつくって、必ず田村さんが座長でやってくださって、どうしてもお休みになったときもあったかもしれないけど、ほとんど田村さん

が座長してくださったよね。富野市長はその席に必ず出席していましたけども、絶対発言はしない。市役所の主だった幹部ぐらいの人たちが口出すぐらい市民と一緒に。市民委員もいましたし、いわゆる専門家の委員、いろんな所の大学の先生だとかいて、それプラス市民と。市民と行政と専門家が3分の1ずつぐらいいたかな。そういうふうにしようって言ったのは、恐らく田村さんがそういうふうにご提案なさったんじゃないかと思いますけどね。懇話会そのものは富野さんの発案だったと思いますね、基本的には。だけど、富野さんがもしかしたらインフォーマルに田村さんに相談なさったかもしれない。富野さんは田村さんのことを尊敬していましたからね。そのときに口利きをしたのは僕だったかもしれないけども、そこら辺もあまり正面切って紹介したとか何とかって記憶はないけど、ずるずるとそういう形になってきたっていうそういう感じですね。ですから、市長が出席してるけど発言しないという形で、あの頃の逗子の職員っていうのは、本当に生き生きとしていましたね。富野さんが市長になって、みんなの意見を。そういうときに、なるべくたくさんのおディエンスを集めて、それで係長クラスまでの暇なやつが出てきて聞いているっていう形でね。それと市民もいましたし。だから、非常にオープンな形で。私は横浜であの頃仕事をしていて田村さんに言われたのは、要するに、各部長なんかを目の前にして並んでたと思うんだけど。君たちが今やることは、そういうふうにしたかどうかははっきりしないけど、要するに、君たちは、まちづくりとか何とかは大体みんな素人なんだから、今、君たちの仕事の大事なものは、いいコンサルタント、いい専門家を見つけて、その人たちと一緒に密に仕事をして、それでその人たちから盗めと。その人たちから学べと。そういう段階だよっていうようなことを、われわれを前にして言ってたからね。それはすごい率直だった。

それで、田村さんの僕が偉いと思うのは、いろんな意欲的なことをやらせたいわけですよ。意欲的なことをやると、成功するとは限りませんよね。失敗もあるわけ。でもそれは、失敗を恐れるなど。そういうふうにご公言なさったかどうかは知らないけども、僕が理解しているのでは、俺が責任を取る。だから君たちは、君たちがやるべきだと思うこと、やりたいことを、いいコンサルタントと一緒にやりなさいと。だから、役人っていうのは失敗すると必ず足引っ張られるわけでしょう。だから意欲的なことできない。でも上の上が、俺が責任取ってやるって言うんだから、自由な気持ちでできるわけですよ。だから、僕らも横浜市の職員と一緒に仕事をしていて、仲間意識で本当に楽しくできた。非常に前向きに。それはもう、田村さんのああいう指導のおかげだね。ちゃんと責任を取るんだという、私が取らなから、みんな逆に役人であっても、意欲的なことをいろいろと手を出したっていうか、実施に移していつていましたよね。

今の逗子の市役所なんか見ると、本当に役人が事務処理なんか萎縮していてリスクを全く取らないし、なるべく自分が言い出しつぺにならない。それで、住民参加のまちづくりなんて言って、住民参加が自分たちの言い訳になる。住民がこう言ったんですからこうしましたみたいなね。自分たちが行政の専門家としての責任を取ろうとしないで、提案があつたりすると、ワークショップに参加してる住民に多数決ではかろうなんて言って、客観的な根拠

によって決めなきゃいけないようなことを、そういう形で自分たちが責任を取ろうとしていないっていうことは、全くなっていない。だからそれは、逗子の職員たちもある意味で気の毒な面があって、池子の問題で10年ぐらいやっさもっさしたわけでしょう。その間に市民が2派に分かれて。そうすると役人としてはどっちにも味方をしないというふうな習性ができてきて、だから、やるべきことをあまり自分で考えていかないという。

とにかく、富野さん市政が終わった後で今度ガラッと、富野さんは2期やったかな、3期目の途中ぐらいまで澤さんやったのかな。その次に平井義男さん（1994/1998）がなったのかな。平井さんがなったけど、平井さんっていうのは真面目ではあるんだけど、あまりアイデアというか、新進の気性がそれほどあるわけじゃなくて。

その次になったのは長島一由（1998/2006）だ。僕はそのときに、殿ご乱心って言われた。市長選挙に出るな。それで同じ名前の長島で、長島一由。僕は長島孝一でしょう。一字だけ違うんで、長島一由に敗れたんですよ。一説によれば、一由と長島孝一とを取り違えて投票した人がたくさんいたぞということになっているんですけども、それは分からないですけどね。そんなことで長島さんっていうのは、市長になりたくてなった人っていうか、なんか理想があって政治をやるっていうタイプじゃないですね。市長職に憧れているっていうかそういう若い人。なったときは30代だったかね。あまりきちんとした考え方で筋道の中で何かをやってたっていう印象はなくて、結構、役人も困った場面もあったらしいですよ。長島市長の後には、平井竜一（2006/2018）がなった。平井竜一は真面目なサラリーマンなんですけども、だから、あまりビジョンはないですね。

Cー もともと懇話会にいましたよね。平井竜一さんは懇話会の市民委員じゃなかったでしたっけ。

長島 でもあったかもしれない。それから、まちづくり研究会のメンバーでもあったんですよ。だから、どのくらい彼から可能性が出てくるかと思ったけど、あまり出てこなかったっていう、そういう感じだった。ちょっと残念だった。それで、富野、澤、それから平井義男それからちょっとでたらめな長島なんていうので、役人がこんなになっているわけですよ。だから、平井竜一（2006/2018）さんとしては庁内をまとめるっていうか、鎮めてまとめるっていうことに恐らくエネルギーを随分使ったと思う。だから、自分で何か考えて、とにかく役人を立てていろんな話を聞いて持っていくっていう。あまりリーダーシップがそれほどあるっていう感じはしなかったね。そういうようなことでね。

それで、今、新しい桐ヶ谷覚（2018〜）さんっていう材木屋さんがなったんですけども。その方も古い桐ヶ谷っていううちは古い材木屋の家系で、そこに養子に入った方なんですけども。決して悪い人じゃないんですけども、やはり、市長としての本当の心の準備とかそういうものはちゃんとできていないっていう感じだよ。だから、どうなっていくか。それで非常に商業的な考え方をする人だから、例えば、逗子の財政がこうだからそれを盛り立てるため

には企業誘致をしなきゃいけない。だから、海沿いの所の下水場の隣の空き地、今、古河電工が持っていた土地が空き地になっているんだけど、そこに高層のホテルを建てて客を呼ぶんだみたいなね。あそこは本当は5階ぐらいまでしか建たないんだけど、それを撤廃してやるぐらいのつもりでいたけど、結局できないんじゃないかな。そんな簡単にいろんな高さ制限とか容積とかを変えるわけにはいかないですよ。それを5月までに変えて、プロマイドっていう、いろいろできてやっている。あれは韓国系の市長なんだけど、そこにやらせて総会までに、つまり5月の総会までにそこへ建てる許可を出したいなんていうことで市長になったんだけど、そうは簡単にいかないです。日本はさすがに法治国家だからね。

Dー 今、お話をお伺いしていて、市長が変わると職員の人にも混乱するってお話だったじゃないですか。富野市長と澤市長のときは市長と市役所職員の信頼関係ってというのは一番あったっていう形ですか。

長島 すごくありましたね。

Dー その中で、田村明さんも職員の人を啓蒙したりしていたってということですね。

長島 そういうことですね。

Dー それは懇話会の場だけじゃなくて、なにか集まりを持ったりしてたってことですか。

長島 それは僕は知らないけども、僕が知っているのは懇話会の場だけですけどね。田村さんだって忙しいから、そう逗子市ごときの所にそんなに始終顔を出すわけにはいかないと思うけど、もしかしたら富野さんが田村さんを訪ねていったケースもあるかもしれない。私は知りませんよ、事実関係は。でも富野さんは非常に田村さんを尊敬してたですね。田村さんもやっぱり富野さんを育てようっていう気があったから。

Dー 長島さんが懇話会の座長に田村明さんを推薦したときは、やっぱりそういう市役所職員の人を啓蒙してほしいっていう思いもあったんですか。

長島 僕はそんな正式にリコメンドしたかどうかっていうことは、そういうフォーマルな記憶はない。だから、いろいろ富野さんとは運動の期間中からずっと一緒だったから、いろんな場面でいろんなことを話しているから、その中でそれを僕はその頃、横浜市と仕事をしましたからね。横浜でああだこうだって話をしているから、それを富野さんとしては受け取って、富野さんのほうから自主的に言われたかもしれないです。恐らくそうだと思う。だから、僕が富野さんと田村さんをどっかで引き合わせたとか、そういうことはない。

Cー 富野さんはどうして田村明さんを知っていたんですか。

長島 それは僕とかキャサリンを通じてでしょうね。それからさっき言ったうちで年に一度か二度そういうパーティーなんかをやったときに、富野さんも呼んでたから、田村さんも来ていて、いろんな人が来てたから。だから、ここは村ですからね。小さなコミュニティー。

Bー あの懇話会のときに、グランドデザインの部会もあったじゃないですか。あのグランドデザインについては、長島さん、どういうふうにお考えなのか気になって。実は本を読みまして、あそこにグランドデザインを生かそうっていう考えもあったっていうようなお話があったんですけど。その辺はどのように、今、お考えなのか聞きたいなと思ってたんですけど。

長島 生かしたいからグランドデザインを作りたかったのね。当時はまだ景気のいい頃だったし、市が財源も持っていたから、そういう意味では富野さん、いろいろやりやすかったと思うね。駅前の再開発、広場の整備なんかもやったし、いろいろと市の機能を新しくしていことに関してお金が使えた。それもあつたし、やはり富野さんとしても、そのときまだ40ぐらいだからね。だから、将来を見ていろいろやりたい。池子のいろいろなごちゃごちゃしたものをとにかく乗り越えて、新しい街にしたいっていう意識がとても富野さんあつたと思うのね。

富野さんって本当に素晴らしい市長だったと思いますね。だから、僕としては後にまた富野さんに帰ってきて市長になってくれたらいいなと思うんだけど。本当に職員とラポールが非常にいいし、やっぱり頭がいいし、いろんな知識も持ってるから、それと割と柔軟に行政マンと一緒にデベロップしていくことができる人でしたね。その中でグランドデザインをやりましようっていうのは僕が言ったのかどうかはそれも分かんないけど、僕なんかが言いそうなことだけど、実際にそういうふうにかしこまって言ったかどうかは分かんないけどね。やっぱり将来のことを考えてやりましようっていうことがあって、20年先とかそれぐらいですけど。

あの中で、今でも一つやりたいと思ってこだわりたいと思っているのは134号線。あれは前のオリンピックのときに強引に造っちゃったんですよ。江ノ島のヨットハーバーをつなぐんだっていうようなことで。だから、今まで一番静かで、一番安全で、一番空気のいい所が、一番うるさくて、一番危険で、一番空気の悪い所できちゃったわけです。それで、あれを使っている車の逗子の人が使っているのが1パーセントもないわけ。全部、通過交通ですからね。そのためにわれわれがそういう目に遭わなきゃいけないっていうのはおかしい。だから、海岸の一番いい所を自動車専用道路が通るっていうのはおかしい。それはもうちょっと後の話だけど、フランス人のチェロひきの友達かなんかがうちに来るとき、たまたま彼

は海岸へ出て海岸からうちに来たわけ。玄関を入った途端怒り狂ってるわけ。なんだこれとは。要するに、こんないい住宅地と海岸の間に自動車専用道路を造るなんて野蛮だって、カンカンになって怒ってる。人のことなのに。そういう本当は世界的なレベルからいえば常識のところですよ。

僕らの夢は、あの上をプロムナードにして、それで車をその下を通す。そうすると1キロ以上のプロムナードができるわけですよ。そしたら、湘南の海リビエラではないけどそういう所になって、そうするといろんな商業もそこに、それから人もたくさん来て、穏やかなにぎわいができるだろうっていうことがあって。

それで、そのときに林泰義さんってご存じかな。あそこの事務所に委託を出して、そこでフィージビリティスタディーをやってもらったわけです。ただ、工事中の仮設道路の建設費も含めて100億円でできると、道がですね。100億円なんていうのは大きいようだけど、あれがもし国が認めた、国の手伝いですから、なれば国が半分出す。残りの半分は県が出す。市は全体の4分の1だけ出す。そうすると25億円でしよう。そうすると25年間利子なしで考えれば1億円ずつ税収があがれば、市としては償却できるっていうそういう考えですけども、それを考える。いまだに僕は生かしたいと思っている。それで、逗子がそういうふうに経験すれば、湘南海岸全体が隣の市町とやればいい地域になると思いますね。日本のリビエラになるでしょうね。そういう夢もあればということで、それは何とかしたいと思っているんですけどね。

あそこは割と安くできるのは、地下埋設物がないんですね。ボストンの話、知ってるでしょう。ボストンの都心部を12マイルだったかな。片側10車線だか12車線だかの高速道路が通って、それを全部地下化したんですよ。それ以来、全部公園的な用途。10年ぐらいかかったのかな。当初の予算が1兆2000なんかだったか忘れたけど、とにかくそれが倍ぐらいになったんですね。でも、今、行ってご覧になると、とにかく本当にボストンの都心部をぶった切ったそういうものがなくなって、そこが基本的に緑地になってアメリカの公共的な建物が建ったりして、全く生まれ変わったんですね。アメリカ人ってやるときはやるんだよね。だから、日本も本当は今度のオリンピックの前にそれができているべきだったと思うね。50年前にできた、前のオリンピックから。50年の間に、あのときはなんか新幹線とか何かがあって……。

B-1 逗子の話とも少し関わるか分からないですけども、もうちょっと漠然とした話になるんですけども。田村明さんが晩年までずっと言い続けた言葉に、市民の政府っていうのがあるんですけども、長島さんの本にも市民の政府っていう言葉が出てきて。市民の政府って言って思い当たる状態とか、そういうのっていうのはありますか。大ざっぱな質問なんですけど。

長島 僕自身の市民の政府っていう言葉を聞いて思うのは、日本にはまだ市民っていうの

が育ってないってことですよ。だから、田村さんがどういう意図でその市民の政府っていう言葉をお使いになったか、そういう議論をしたことないんだけど。要するに、日本に市民をつくっていく、市民社会をつくっていく、市民社会のルーツとしての市民をつくっていくという。それがやはり日本の将来にとって非常に重要だと。それを市民感覚を持つためには、街が自分の生きている社会の誇るべき楽しい場になってるってことは、ある程度必要だろうっていうことじゃないかなと思いますね。

だから、田村さんだって、当然日本に市民社会のルーツが無いというのは当然ご存じな訳で、市民社会のルーツがあるのは、残念ながらヨーロッパだけだからね。だから、市民というものをどうやってつくるか。市民ができれば、その社会として市民社会が発生して、その結果として、この市民社会の論理が空間的に表現されるのが本当の都市の姿だっていうふうには私は思うんだけど。そこが田村さんもそう考えてらしたけど。だから、市民というのをつくるに当たっては、いろんな自分の地域のまちづくりを参加してつくるとか、あるいは市の肝入りで作ったスペースなり仕組みを楽しんでもらって、それによって街に住むことの楽しさとか誇りを持ってもらうっていう、そういうところのレベルでもあったと思う。だから、それは短期的に今できることとしては、例えば、岩崎君なんかやっただ、タイルでね、石使って一番安くできたの。絵タイルでそれを伝えていくと、あそこの関内の所まで。

僕も逗子で市民運動に参加したけども、やっぱり池子の森を守るという市民運動は、やはり市民をつくる大きなメカニズム、動機になっているんだと思うんですね。だから、その市民意識をそういう運動を足かけ12年ぐらいやって、市民的な意識を持った人っていうのと、元からの旧弊な封建的なコミュニティーとの間がうまくいかないっていうのは、まだ日本の社会のある意味で当然の成り行きで。典型的なやつは、市役所の隣に亀岡八幡あったでしょう。あそこに防衛庁が神主か何かと話をつけて、池子の住宅地の模型を展示するって持ち込んできた。そしたらそれを感じた主婦たちが反対して氣勢を上げたわけ。そうしたら50~60の男たちが数人そこにやってきて「おまえたちは、市民だ、市民だって言うけど、俺たちは国民だぞ」って言うわけ。典型的なの。だから、国民観っていうのは、要するに、まだ戦争中の天皇陛下のもとにあって、一糸乱れず国を造っていくシステムに乗ってるのが国民であって、国のその方針に従わない、それに文句を言うなんていうのは、これは非国民。だから、彼らは本当は、俺は国民だぞと。だけど、おまえたちは非国民だぞって言いたいんだけど、非国民っていう言葉を使うとあまりにもあれだから、おまえたちは、市民、市民って言うけど俺たちは国民だぞと、そういう言い方になってる。

そういう社会なんですよ、まだね。ですから、まだ日本の社会のありようっていうのは、そういう市民というものの存在を、自分で実感してきてないんですよ。国民はとにかく国民意識っていうのは戦前戦中にかけて上からワーワー言われて、おまえ国民だぞというあれがあったんだけど。だから、その人たちは俺たちは国民だぞと。国に対して、国がやろうとしているプロジェクトに対して文句を言うのは、これは国民じゃない。だから非国民だ。

そういうのが市民なんだろうってそういう状態っていうのは、まだそのまま残ってるんじゃないかな。

Aー 個の問題っていうのは、個人の立場をずっと戦争終わってからもずっとまだ引きずってるわけですよ。

長島 そうですね。だから、あのときは怖いと思ったね。こういう人たちが、ちょうど社会をけん引してる世代の人たちでしょう。でも、女の人たちでそこまで言ってる人はもしかしたら男の半分ぐらいかもしれないね。だから、女の人の方がもう少し柔軟だし、地域に根差した生活をしているわけだから、逗子市のほとんどの人間は東京・横浜に通勤している。だから、中央志向の人たちですよ。だから、それはメンタリティーとして非常に強く残ってる。今でもあまり変わらない。だから、そういう中で僕も富野・澤の時代が終わってから、市のいろんなまちづくりに関わっていきたくて思っている、そういうおまへたちは、市民、市民って言うけれど、俺は国民だぞというグループからは全く排斥されるわけ。だから、あまりそういう行政の中でのいろんな委員会だとか、そういうものにお呼ばれすることがないですね。

一昨年ぐらいに新総合計画懇話会というのを何か市がつくって、その委員は市が決めたのは大体、元横須賀の役人だった人がどっかの学校の先生になったような人、そういう行政側がこう企画して話を聞くっていうか、自分たちのことを分かってくれると思うか、あるいは無難に運んでくれるっていう人を専門委員みたいにして呼んで、それが委員長になってる。僕はたまたまそこに入ったのね。それだけは認めるんだけど、くじがあるわけ。要するに、一般の人たちが市民枠というのが3、4人あるのかな。それはくじで決める。だから、排除はできない。それを排除しなかっただけは、それだけのインテグリティーはまだ市役所にある。つまり、こいつは駄目だって決めるんじゃないで、ちゃんとくじをやって、くじが当たったからしょうがないからっていうね。だって全然歓迎されなかった。

Cー さっき池子は市民をつくるための一つの仕掛けだけだったっていうふうにおっしゃったけども、実際に市民っていう歴史を持たない日本で、市民をつくっていくためには、池子が一番いい例かどうか分かりませんが、市民がみんなで考えるような素材があって、どうしたらいいかということ議論したり、協力したりすることをやっぱり積み重なっていくっていうか、やり続けることが大事ですよ。

長島 たまたま池子という非常に極端な例で出てきたんだけど。だから、それがもう少し日常的なレベルのいろんな課題とか問題でそういうことが起こっていくと、それが積み重なっていけばいいんだけど、恐らくやっぱり100年単位の時間があるんじゃないですか。だから、池子は極端な例だけど、たまたまそういう市民の半分ぐらいが嫌だっていうようなも

のがあったんで、それに対して参加して、その中で10年もやってるうちにどんどん自分の意識がそういうふうに向いていったっていう、作られていったっていうケースかもしれない。非常に特殊な例ではあるけども。

Cー それから富野さんは懇話会とかつくって、市民の人にも政策の決定のプロセスにも入ってきてもらおうってことをやったわけですけども。そういうふうにして市民を行政のほうに招き入れるっていう考え方の首長と、いやもう、そういうのは、いらないと。排除しちゃう、市民は関係ないよという人たちがせめぎ合ってるというのが実際なんですかね。

長島 今、せめぎ合ってるというところよりも、もうそういうものがほとんどほかさされているというのが。市民がこう言ったああ言ったっていうのを、自分の都合のいいときに行政が使うんですよ。本当は行政が判断してそれに対して責任をもってやらなきゃなんないことを、市民参加で多数決でこうなりましたから私たちはこうしますと。それで自分の責任はなくなっって、そういうメンタリティーを。

ついこの間もありました。防災会議っていうのがあって、そのときに市民のワークショップっていうのを何回もやって、市民に避難路の要請を許可して、それをなしたのは、それまではいいですよ。だけど、川の向こうの桜山にこういう人が逃げる道筋っていうのがあるんで、それが避難路として彼ら描いてた。だけど、実は桜山っていうのは行政が持っている土砂災害マップを見れば分かるのに、要するに、崩壊したりなんかする土砂災害が全面的に起こる所。だから、関東大震災のときも、あそこの裾にいた、その近くの海岸にいたベルギー大使のバツソルピエールっていう人がいたんですけど、その人は、あれが引いて津波が来るっていうんで、当然逃げるのは自分の裏山に逃げればいわけだけど、逃げられなかったんです。それで結局、富士見橋、あそこの橋も落ちてて、だけど、水が引いていたから、浅かったからどうにか渡って、うちのここへ逃げ込んできたんです。それがちゃんと書いてあるんだけどね。だから、そういうことを僕も説明したんですよ、その担当者にもね。あそこの所は、土砂災害マップにあるように、大震災のときもそういう状況で、向こうにいる人は逃げない。むしろ、川向こうにいる人たちは、こっちへ逃げてくる可能性があるのに、彼らは避難通路として、ただそれを道筋を描いて、それで非難する。そのことを言うと、それは皆さんに多数決で決めてよって、手を挙げてもらってるの。信じられない。

だから、自分たちの責任を全く取ろうとしていない。市民参加での彼らが期待すべきは、どんなことが市民の課題になっているか、あるいは問題になっているかっていうことを受け取って、それを専門家集団として行政と、あるいはコンサルタントと一緒にあって、客観的なアンサーを作ってくる。その手腕なんだけど、あたかもそういう権利を与えているわけじゃないくせに、市民が決めたんだからそれでいいでしょうみたいに自分たちは責任を取らないっていう、そういうすり替えをしている。だから、とんでもない。だから、全く今

の行政の人たちは無責任。全員がもちろんそうじゃないと思うけども、それが過去四半世紀の間に市役所の内部のエトスっていうのは、そうなるようやってきたからね。

Eー 逗子のまちづくり懇話会の際の田村さんの態度というか、市民の声をなるべく広く聞きましょうというのは、富野さんの姿勢でもあるし、田村さんの姿勢だったと思うんですけども。市民の声だったら何でも聞くというわけでもないでしょう。市民はいろんなことを言うけれども、取りあえず聞きますね。聞くけれども、それを政策にするときにはいろんなフィルターをかけたり、優先順位を付けたりとかいう形で政策になっていきますでしょう。そういうところのさじ加減というか、田村さんはどういうことをされて。

長島 そこまでどういうふうに、フォーマルな形で指導されたか分からないけども。恐らく、富野さんにはそういうことを説明してサジェスションとして与えてるはずですよ。田村さんはだから、やっぱり関わった以上は自分が関わった成果というか意味がないとつまんないと思われる方ですからね。富野さんっていう方は非常に頭のいい人だし、実行力もあるし、インテグリティのある人だから、富野さんに対してだいぶ田村さんは個人的にも薫陶をたれたんじゃないかと思いますけどね。これは私の世代から言うと、遺言的には日本に本当に市民の政府ができるためには、市民の社会っていうのがなきゃ市民の政府ができない。でも、市民の社会をつくるには市民という自覚を持った個人がたくさんいないとそれはできない。だから、どうやって市民意識というのを、例えば、いろんなまちづくりの活動とかいろんなことを通じて、まちづくりと限らないと思うですよ。地域のいろんな文化のことでいいし、歴史のことでいいし、その地域に対する愛着を持って、それを維持していくっていうか。そういうのが時間をかけてやるよりしょうがなかった。ヨーロッパだって、中世ルネサンスの市民社会ができたのは、紀元後十何世紀でしょう。やっぱり 1000 年ぐらいはかかっている。

Bー 割と最初に懇話会の資料とか読むにあたって、市民運動から始まっていたので、今の長島さんのお話を聞いて、市民をつくるっていうそういう要素のほうが強かったっていうのは、結構個人的には面白いところだったんですよね。ある市民の声を聞くじゃなくて、まだ市民ができていないから市民をつくるっていう、そういう。

長島 そう。だから、あの運動を通じて市民に脱皮した人がたくさんいると思う。でも、その数はそんなにたくさんないし、時間とともにそれがまたフェードアウトしていくというあれがありますからね。だから、それは継続的に。ただ、今から 12~13 年前かな。まちづくり基本計画っていうのがあって、長島市長のときの最後のほうで作ったんですけど。そのときは市民参加で作りましたってことで、あれをとにかくけしかけてあれしたのが長島市長だから、それは認めてるんだけど。そのときに 130 人市民が集まって、中学 3 年生から

83歳のおじいさんまで含めて、それを五つだか六つだかのテーマ別のグループに分けて、1グループ大体20〜30人ぐらいでやって。結局、2年ぐらいやったのかな。それが市民がまとめて、それは全く市民だけでやったんです、コンサルタントとか入れないで。富野時代にやったランドデザインのことも、もう富野さんがいなくなった途端に棚上げですからね。どこ行っちゃったか分からないくらい。それを僕が口出して、あれを引っ張り出して参考にしたらって言いたいところもあったんだけど、それは一切しないで全くゼロからやって、一応できたんですけども。できてから議会を通るのに2年近くかかったんだよね。だから、議会の中で、さっき言った、半分は作っても半分は反対派だから、ああいう市民だ、市民だなんて言ってる連中が作った。それとは全く人間的には重なっているのは50分の1ぐらいでしょうけど、20分の1ぐらいかな。だけど、そういう市民参加で作ったなんていうのを信用しなくて。議会の議論というのは、考えていうのは、俺たちが市民を代表して議会をやってるんだと。従って、それを市民参加がどうのこうのっていうのは、俺たちが言うことを聞いてればいいんだっていうそういう論理なの。それがどこでもきつとそういう自治体であるんじゃないですか。だから、なんのために議会があるんだと。なんのために俺は議員になってるんだと。俺は市民の代表としてエレクトされてこの議会に出てるんだから、議会の決定が、議会での議論が市民参加の最たるものだっていうそういうあれ。だから、そういうようなことが議論になって、基本計画は議会を通過するのに2年ぐらいかかってるんですよ。だから、全部で3年ちょっとかかったかな。そんなあれでしたね。

B一 それは市民へ脱皮した例として考えられると思うわけですかね。富野市長時代に市民へと脱皮した人たちが、そういう下地を作ったっていうふうに考えられるんですか。

長島 多少は脱皮したというか、市民的な手法、方法なり、価値観を持つ人が増えたと思いますですね。だから、恐らく1年半も続いたと思いますよ。なんかの全部の部会のミーティングを合わせると三百何十回やったのかな。だから、一人の人間がとる場所は40回ぐらいかもしれないけど、五つの部会を全部集めてみると三百何十回やったんです。部会のあれで言うと、例えば部会の名前でいうと景観部会でしょう。それから緑の創造の部会とかね。それから何だかんだってある。その中で自分たちの議題を作って、それで議論をして、それをまとめる。もし本を読んでくださったんだしたら、前文みたいなありましたでしょう。あれに要約されてると思えばいいんだけど、あれは逗子に住んでた北さんっていう作家がまとめたんです。ああいうことです。あれを読めば大体その雰囲気分かりますね。それがどうして、もっとその精神と内容に従って新総合計画にしなかったのかって不思議なんだけど、全くそれを置いといて別のそういう総合計画の審議会とか何とかつくてやってるわけでしょう。それを役所の都合のいい人たちをみんな集めてやってるわけ。ああいう行政っていうのは、何か継続性が一つの命だと思うんだけど、いい意味の継続性をなくしちゃってるところなんですよ。

Cー 市民参加で作ったものは、今、どういう扱いになってるんですか。

長島 それは、役所の公式の発言によれば、それは新総合計画の中に全部取り入れていますっていうこと。と言ってるんだけど。われわれから言わせると何か怪しいと。だから、そういうまちづくり基本計画に携わった人たちは、新総合計画の作成にはほとんど入っていない。たまたまくじで入った人、みんな。だから、しっかり遅れた部分の行政のままに作ってるっていうね。だから、形式だけはもってもらいたい。文言としては、要するに、その基本計画を生かしてそれを総合化してますと。

Bー うまく総合化って言葉に入れられちゃってるって印象ですね。

長島 そう。それで決して基本計画のどこがどういうふうに生かされてるとか、新総合計画立ち上がってるかっていうそういう説明は一切ないんですよ。全くそういう気持ちがないのかね。だから、僕はもう今、落魄しているってことですよ。

Aー 何となく言葉でもって新しい言葉を作って、それでもってまとめて、今までの概念は何となくそいでいるって感じがしますよね、今の仕組みがね、全体には。だから、先ほど国民と非国民の差みたいな話と、市民とがどういうところに介在してるのかっていうのも含めて。

長島 市民は非国民なんです。彼らの頭の中では、まさにそう。市民、市民って言ってるのは非国民。つまりお国の言うことを聞かない人たちは、それは非国民。

Aー 僕は終戦のときに15歳なんです。だから、とにかく国民学校と中学3年で終戦ですから、義務教育の期間全部、国民学校的思想の中に漬けられていた。だから、国民学校1年生だけじゃなくて、もう世の中の仕組みがそうなるっていうことを、散々もう浴びせられて漬物になっていたんだけど、田村家がたまたまかなりそれと違っていたのは母親なんです。母親とさらに祖母。それが横浜の共立で、それはアメリカのほうのミッシヨナリーが来て、アメリカの教育システムで全部やって、寮もそこでやって、英語でやったぐらいの所だったもんだから、母親とおばあさんがそれで、なおかつ、おばあさんの、つまりおじいさんは教会の東北の田舎の開拓伝道師だったんです。だから、わが家はかなり欧米の思想に漬かっていたということがあって、先ほどキャサリンさんが言っていた中ぐらいに入るんですけど。田村明が欧米的なそういうあれを持っていたのは、その影響があったんだと私は分析してるんですけどね。

長島 やっぱりそうですよ。だから、そういう人たちは国民学校制度をある意味で生き延びてるんですね。僕なんかが小学校入ったときに、国民学校になったんですよ。尋常小学校から国民学校になった。歌わされたのが『元気で体操、1、2、3。国民学校1年生』。そういう時代だったんですね。だから、皇国史観と違っただけの歴史観というか、価値観を持ったのは、わがクリスチャンくらいでしょうね。日本人っていうのは、ある意味ですごく素直だし、非常にいいところで自律的なんですけどね。大体、クリスチャリティーっていうのは他律的であって、神がこう言ってる、絶対神がこう言ったんだから、その規範にのっとって暮らしていればいい人間で、そうじゃないやつは悪い人間って分けちゃうみたいなどころあるでしょう。だけど、意思的にいいほうに神の則に従って生きようという意思はあるんだよね。だけど、基本的には他律的じゃないですか。だけど、日本人は本当に思うけども、日本の、今だいぶ似たり寄ったりしてるけれども、日本の自然というのは、山あり川あり海もあって本当に優しくて美しい自然で、その中で何万年も生きてきた人間がつくっているから、だから、日本人の根本には善とか悪とか罪とか罰とかっていうのはなくて、きれいとか汚い、あいつはきたねえやつだとか、あいつはきれいな心を持ってるとかっていう、そういう情緒的な判断。だから、非常に自律的じゃないですか。それは非常にそのままでもいいんだけど、ある極端なイデオロギーみたいなのを押し付けられたときに、それに対して意思的に反抗するっていうことは非常にできない、するのが難しい、そういう人間ですよ。日本人ってね。

B-1 長島さん、もう一回まちづくり懇話会に戻って聞きたいんですけど。最初の1年間っていうのは、割といろんなテーマやったじゃないですか。それで1年間予算が付かなくて、ちょっとお休みしたじゃないですか。それからまた富野さんが再選されて、それで再開してから割と結構いろんな本格的な議論をされてると思うんですけど。最初の1年間というのは、あれは富野さんがまだ市長としての基盤ができてなかったから、割といろんなテーマが定まらなかったんですかね。

長島 基盤ができてなかったっていうことももちろんあるけども。要するに、庁内の再定義ですよ。それまでの行政のあり方とか、役人のメンタリティーとか、視野の問題とか、そういうものを広げようとか、それを変えようっていうことが、恐らく一番の眼目だったかもしれない。田村さんは、恐らく横浜でも最初からみんな役人が一緒になってやろうよっていうふうにはなかったと思うんです。だから、いろいろな人を教育する時期っていうのがあった。

A-1 それが一番最初は大変な仕事だったって。だから、高速道路を地下にやるっていう仕事をやり遂げなかったら、彼はあそこまでに行けなかったでしょう。これはできそうだな、こいつについてりゃ少しいかなと思う人が少しずつできてったんでしょうね。

長島 あれには田村さん、すごいエネルギーを使うんでしょう。毎日、その担当者が国交省だかに行ってたんだから。それがやってるのは大変だった。でも、よくやりましたよね。田村さんは中央官庁の経験も少しおありなるから。

Aー それを見ていたのが一つのターゲットはここだっていうのを知っていたっていうか、やり方を考えてはいたかもしれないですね。

長島 いやあ、すごい人ですよ、とにかく。

Bー それで今のまた1年間、その予算が付かなかったんでお休みしてたけど、田村さんの話では、予算が付かなくなっちゃったよと。みんなで集まって懇話会やればよかったのという発言があったように記憶してるんですけど。

長島 覚えてないです。僕の記憶の中では、1年間そういう空白があったって記憶がないね。何となくなんか続いていたんじゃないかな。

Bー 明解に1年間休みになっているんですよ。

長島 だから、自由研究みたいな形でやってたのか。予算を付けるってことは、例えば、田村さんをお呼びしたときのお金をつけるとかそういうことでしょう。田村さんが俺はいいよって、いいわけで。それから役人はもう給料もらってるわけだから、休みで集まるわけですし。

Bー ただ、懇話会としては開かれていなくて、記録も残ってないんですよ。記録は全部情報開示請求で公開してもらって、こんな分厚いんですけど。全部見て、みんな読んでるんですけど。その1年間は空白なんですよ。公的記録はない。だから、長島さんの感覚のほうがいいかもしれないんですけど、とはいえなんかを活動してたってことですね。

長島 でも、やってたんじゃないかと思う。お休みしていたってそういう記憶はないね。ぼけてるのかもしれないけど。

Bー 最初の記録を読んでも、やはり田村さんが富野さんに行政運営のやり方っていうのかな、割とそれを結構薫陶を与えてるっていう感じはするんですけど。

長島 田村さんは本気になって、富野さんを育てようとしてたと思うよね。

B－ でも、そのときに逗子市の状況からいって無理だったのか、どうだか分かんないけど、行政の中に、例えば昔の横浜の田村さんみたいな人を育てる、あるいは外から入ってもらうとかいう発想はなかったんですか。

長島 育てるのは富野さんが、松下さんとか何人かの職員を、田村さんとどう協働したか知らないけども、やっぱりその中で前向きの、しかも能力のある人を抜てきして、2階級特進ぐらいさせてましたよ。

B－ 企画室長みたいな人ですか。会議を総括している人ですよ。

長島 そう。だから、痺れたやつは2階級特進ですよ。それが何人かいましたよね。開発要綱じゃないですが、そういうのを作るのもそうだったし。

B－ 武内和彦さんと一緒に環境管理計画、しっかりしたのを作りましたよね。

長島 武内さんを紹介したの僕だけだね。武内さんとは、事務所の仕事で関西のほうのニュータウンのことだったかな。なんかで手伝っていただいたんだけど。武内さん自身をどうやって見つけたのかというと、東大の農学部の、後に農学部長になった先生が逗子に住んでいらして、その娘さんとうちの娘とが幼稚園行ってかなんかで一緒に、それで親しくなった。武内さんはその先生の弟子なんです。それで、彼が武内さんを紹介してくれて、いろいろとお世話になった。その先生は僕と同年くらい。

B－ それで結果的にまちづくり懇話会は、澤さんになって2回ぐらいで終わってるようなんですけど、それは、もう澤さんも辞任されるという流れの中でもうやめたってことですか。

長島 そうね。ある意味で富野さんはずるくて、もう絶対にこれは国に負けちゃうっていうことが分かったときに、澤さんに移管したんだからね。それはフェアなやり方だったかどうかというのはちょっと疑問があるけどね。もうちょっと最後まで頑張ってたほうがいいよ。

B－ それで移管して、でもご自身は市民運動として池子の運動を富野さん、継続してやっていますよね。

長島 僕の記憶が合ってるかどうか分かんないけど、市長を辞任されてすぐどっかの大学

に要請したよね。だから、そういう話をもともとあったのか知らないけど。きっと富野さんの読みとしては、女の人だったら女の人たちを抑えられるということもあったかもしれないし、女の市長を政府がそんなにいじめないだろうと思ったか分かんないけど、どういう思惑があったかね。だけど、3分の2ぐらいの人は、あの終わり方は富野さんはひきょうだったっていうふうに評価している。

B一 やはり澤市政も終わって役所の中ってというのは、相当またガラッと戻ったって感じですか。

長島 そうでしょう。だから、澤さんのときまでは富野市政の人事はほとんどそのまま受け継いでるけども、澤さんがいなくなってその次の平井市長になったとき、ガラッと。ポジションを変えたとかってということもあったでしょうし、全くメンタリティーがあれじゃない。だから、役所の中も二つに分かれちゃってるところがあって、市民も二つになってる。だから、それはまだ後遺症がありますよね。僕なんかいろんな市民のまちづくり活動とかそういうのに入るでしょう。そうするとそのときのしこりをまだ感じますね。

B一 今は池子の問題、市民意識調査って役所が出してるやつを見ると、ほとんどみんな関心がないことになっちゃってるんですけど、実感としてもそうですか。

長島 あれから何年とか、もう四半世紀たった。だから、われわれ日本人のいいところは、すぐに忘れるっていうことだけ。だから、なかなか市民社会が育たない。こういう狭い島国の中では、思想とかにこだわってると生きていけないっていうところはあるのかもしれない。

B一 長島さんからご覧になって、市民が確立しているか、市民がちゃんとできるかは別にして、市民というものを追究する人たちが逗子は、ジェネラルな言い方だけど、他の地域と比べても逗子は結構・・・。

長島 比べたことないから分かんないけども、だけど、せいぜい10年ぐらいのエンゲージメントが濃密にあっても、その人たちも年取っちゃうわけだし、みんな死んでっちゃうし、だから、あの頃一緒に動いていた市民の中で生きてる人ってあんまりいないんじゃないかな。僕はもう82だけど、この5、6年、随分いなくなってると思いますよ。そういうのは始終起こっていかないと駄目なことなんですね。継続してね。そういうふうな仕組みがわが国にはなっていないし、そういう伝統があればその伝統自身が仕組みだけど、恐らくそれがありませんよね。やっぱりいろんな所でいろんなことをやって、それがあちこちで積み重なっていくってことが、どうやったらできるかですよね。澤さんは今は運動は全然してない。彼女

も随分懲りたっていう感じのところあるのかもしれない。富野さんに見捨てられたっていう気がしてるかもしれない。

Dー 澤市長のときに、田村明さんが澤市長になってからもまちづくり懇話会で2回話してるんですけど。田村明さんは、富野市長は育てようとしたってお話でしたけど、澤市長を育てるっていうのはなかったんですかね。

長島 僕の実体験としては特になかったと思うね。田村さんもいい加減、嫌になったんじゃないかな。富野さんは老けちゃったしね。

Bー 田村さんの実感として、急に富野さんいなくなっちゃったっていう感じですよ。

長島 でしょうね。田村さんもそう思ったかもしれない。だから、富野さんは逗子に帰ってくるのは肩身が狭いっていう感じがあるんじゃないかな。ほとんどコンタクトないもんね。会社も辞めちゃったんじゃないかな、分かんないけど。逗子唯一の公害発生源だった。といっても、公害発生を止めるための機械を作ってる。それで公害を発生する。最後のところはぼけちゃったっていうところがね。だけど、はっきり残ったのは、池子派、反池子派みたいな、市民と呼ばれてる人たちと、国民と非国民の差みたいのはかなりまだあるよね。でも、非国民と言ったような人たちは、もうほとんど死んでるかもしれないけどね。それにしても、その子弟もいるわけだし、そんなに一遍にその人たちが、われわれが死んだからって言って、非国民がいなくなるわけでもないし、国民が増えるわけでもないから。

Bー 逗子の事例っていうのは、すごく市民が政治に深く関与していった面白い事例だと僕は思っているんですけども。

長島 僕もすごい面白いことだと思ったから参加した。今でも市民をつくるという意味でのいろんな末端のいろんな市民活動っていうのはいろいろしていますけどね。逗子文化の会をやってみたりとか、何だかんだっていうのをやっていますけども。そういうふうには地域のレベルで少しずつみんなで考えてやっていくと。それで政治的なインプリケーションなしにやっていくことを辛抱強く続けていかなきゃ駄目だと思うんです。それは確かにまだ残ってるんですよ。その逗子のいろんなささやかな市民活動みたいのが、これが池子の問題がなければもっと小さいのかもしれない。

Aー それは最初からそのことをお話しされてましたよね。池子は一つの市民をつくるための土壌になったんだっていう。

Cー 田村さんと槇さんの関係は、さっき事務所に来て田村さんはよく笑う人だっておっしゃっていたけど、田村さんと槇さんと生まれた年代もほぼ近いし、東京っ子だからシティーボーイっていう感じもしますし、頭もいいし、2人で話していると多分ツーカーで楽しかったんじゃないかと思いますが、田村さんと槇さんの関係ってどんなだったんですか。

長島 そう言われると槇さんと田村さんが、どういう形でツーカーで楽しくやっていたのかっていう現場を見てない。

Cー 笑い声が聞こえてくるだけで。

長島 そう。だから、事務所にこられたときは知ってるけど。でも、槇さんもクールな人だし、槇さんは入れ込む人じゃないからね。田村さんも槇さんという才能を横浜市のために使うっていうことは、なさっていたけども。だけど、槇さんにどうしろこうしろとか、こうしてほしいとか、ああしてほしいっていうことは一切おっしゃらなかったと思う。もう槇さんに任せた。それだけ信頼していたってことなんですね。だから、余計なことは言わないです。ただ、僕が一つ覚えているのは、槇さんがそういう田村さんに何か、どこでのことだかなんかのことで具体的な提案みたいのをしたのかな。槇事務所に委託されたことなんだか他の事務所だか分からないけど、出てきたものが、もうちょっとこういうふうにすればいいのにとか、なんか言ってたね。槇さんが少しブツブツ言ってたらしいのね。そしたら田村さんが「建築の設計っていうのは、80点か90点取ればそれで及第だ」。

Aー もしそう言ったとすれば、田村明は全て80点以上であればいいという主義だった。

長島 ううん。田村さんが言っていたのは「都市計画とかまちづくりっていうのは60点までいけばこれはいいですよ」。そんなに欲張るな。要素が多いんだから。建築みたいに一人の作家が全部あれするわけじゃなくて、コンサルタントしてプロポーザルをしても、それをまた役所が何だかんだでやってって、それで予算がどうのとかいろいろとあって、だから、田村さんは60点主義なんですよ。それは僕は印象に残ってる。あなたは建築家だから、80点とか90点とか取らないと成功したと思わないでしょう。まちづくりっていうのは60点取れば上々なんですよって言ってた。

Bー 建築は自分の敷地じゃないですか。でも、まちづくりとかいうのはいろんな人の、もうそんな80点なんか取れないですよ。

長島 そう。いろんな権利関係もですね。だから、建築を委託されるときは、そのオーナーがしっかりはっきりしてるわけじゃないですか。その目的もはっきりしてて、それを形にす

ればいいんだから、本当は90点以上取らなきゃいけないんだけど、まちづくりはそういうんじゃない、要素が。そこまで説明しなくたって榎さんはそう言われれば、ああ、そうかと思うんだろうけど。田村さんは大人だというか、分かっている物を言ってるから、みんな納得するんですよ。並木のあれだって例の、今、大通りっていう所は、要するに、歩車共存のボンエルフみたいなものを、非常にしようとした、提案してたんだけど。これが住宅公団か何かに移っちゃったら、単に真っすぐな道にしちゃったね。真っすぐな道の中で、車道とこういうふうになって車のスピード出せないで。それで三木さんの後で名前が変わった人、若竹さんか。オランダからその都市計画の視察団かなんか来て、横浜にインタビューして、若竹さんっていう都市計画課長だか部長だかが出て、ボンエルフの話、そんなのはわれわれが数年前にやっていますよって言っちゃったらしいのね。それで見せてくれていうんで行ったら、そうじゃなかった。赤っ恥かいたって。あれは60点いってないよね。40点だね。住宅公団が決めたのかな、最終的に。

B- 道路と警察じゃないですかね。道路は警察がおつかないんで。

長島 あれはもう本当にいまだに懺悔。今からでも変えればいいんだよね。それからまいったのは、シーサイドラインか。あれは僕らが行ってそういうのを、モノレールが通るんだからって行って駅の位置を決めて、それを各コミュニティーの中心みたいにしていこうって言うことを言ったんだけど、横浜市はそんなことは絶対起こらないって言って、そうしたら後で入っちゃったね。なんか変な灰色も入っちゃって。だけど、全然そのマスタープランの趣旨と違ったところにアクティビティーの人の衆参の中心が行っちゃったみたいなことでしょう。それは非常に残念だよね。あれも60点いってないね。田村さんがいたら何点付けますかって今聞いたら、うーん、まあ40点かなとかって言うんじゃないかね。

B- そのまちづくり懇話会で、先ほど長島さんのお話聞いて理解したんですけど。田村さんがどの程度本気になって、まちづくり懇話会に関わっていたのかなっていうのが記録からはあまり読み取れないんですね。議事録から読んでるんだけど。

長島 しかし、あれにアテンドしてた行政マンから言えば神様みたいな人が来てくれたわけだから。言葉であまり説得する必要はなかったかもしれないし、田村さんがいるだけでもってそれで僕は随分雰囲気が変わったと思う。もともとだから、逗子の職員ってそんなに程度の高い人たくさんいないわけですよ。だから、富野さんが2階級特進させたようなのって、大体それぐらいの粒よりでしかなくて、あとはどうしようもないのがたくさんいるわけで。だから、富野さんもそういうそれまで縁故とかで採ってきた職員の質を少しでも上げるために、懇話会とかなんとかって言うのは、暇なやつを全部出席させて聞かしてましたからね、田村さんの異名はとにかく轟きわたってるから、田村明さんが来てくれたっていうだけ

でみんなぞろぞろ出てきたんじゃないかな。

Aー なんとなく、田村明が最初に横浜に行ったときに、大テーブル主義っていうのを打ち出して、要するに、みんなからの意見をうまく使ったっていうイメージがあって、それと逗子の話と何となくスライドさせてうまくやってくれてるんじゃないかという期待も多少あったかもしれないけど、実際に自分が手を出してやれるところでないときに、どこまでの距離でコントロールしたのかっていうのが面白いなど。

長島 具体的なプロジェクトの実行レベルには全く入ってない。そういうディスカッションのレベルですよ。いろんな専門家の話とか、市民の話とか、行政自身の話だったり、みんなで聞くという。ある意味で大テーブル主義は逗子で実行されてたと思う。その大テーブルっていうのも、本当に会議室ずらっと全部各課のヘッドとその次の3人か4人が出てたから、結構大人数でしたよね。それが一つのテーブルといえばテーブルですよ。

そこでもって、ディスカッションをしたのは、講話会の委員と、直接担当部局のあれだけ。あとは聴衆として一緒に聞いているって感じだね。そこで聞かせていくことによって、あとの水平的な交流がすごくしやすくなってきたってことは確かです。それまでだって、みんなこうなんだから。今でもまたそれに戻っちゃってる。全く他のことは知らないっていう。あれはもうしょうがない力学なんだね。

Aー しょうがないですね。

(丁)